

16、信心歡喜

限りのない智慧と 果てしのない慈悲との南無阿弥陀仏は、既に十劫の昔に成就して有つても、機受の信相が抜きになつていたら有名無実である。法蔵菩薩は衆生可愛やの一念から五劫の間思案して、永劫の間修行して、超世無上の大願を成就し、願行具足機法一体の南無阿弥陀仏を 衆生に廻向して下さつてあるけれども 衆生は無明の闇に閉ざされて真如の月を拝むことが出来ないものである。

その名号を領受した相を 第十八願では信樂と言ひ、成就の文では信心歡喜と仰せられたのである。光明無量の智慧が届けば 疑いの曇りが晴れるから信、寿命無量の慈悲が届けば 往生の願いが満足するから樂、衆生は疑いの惑いの為に業を造り、業を造るから苦しむ、苦しむから増々惑うのであるが 我等の疑いの惑いも光明に照らされ、仏智満入すれば疑雲は消除さるるけれども貪愛の煩惱はよく見える、見えるから機の懺悔となり、慎みとなり俗諦の行儀となるのである。

信樂とは、信は疑いの反対、疑いとは本願疑惑、お呼び声に対して二の足をふむ事であり、往生に対して不安を抱く心である。真宗では其の儘来いよ、間違わさぬぞ、往生一つは引受けた、金剛の手は千切れても離しはせぬぞと仰有るから、法に向いた時に、兎や角疑う者は尠いけれども自分の機に向いた時、これでよいのだろうか、ああは仰有るけれども、ひよつと墮ちはせぬか、どうもさつぱりせん、何とかなりそうなものだと心に曇りの有る者は皆疑いである。これを煩惱だと決めて極樂にずり込もうとしているが、疑いの煩惱だから絶対に行かれない。その疑無明が光明のお照らしによつて鮮やかに晴れた世界を 明信心智とも 信樂開発とも言うのだ。私の心は煩惱具足、苦悩が充満している、それを無明と言うのだ。無明を分けた時が 痴無明と疑無明となるのだ。仏智が満入した時 疑無明が消えて痴無明と一体となるのだ。

樂は悩みの反対、生滅流転を続けている苦しみ、毒に酔っているから判らないけれども、見る物聞く物 皆苦しみとなるのだ。其の中の最上の苦しみは 名誉も財産も家庭も捨てて地上を去らねばならない死苦である。それを遁れて永遠に生き抜く生命を

与えられた身になれば之程の愉快な楽しみはないから 楽と言う字が使われているのだ。
之を成就の文では信を開いて信心と言ひ、楽を開いて歓喜と仰せられたのである。信心とは 安心とも信樂とも 深心とも 淳心とも 一心とも決定心とも言えるので、往生の一段を仏の願力に乗托して信順無疑の信を言うのである。「信心と言う二字をばまことの心と読めるなり、まことの心と読む上は凡夫の迷心に非ず 全く信心なり。この信心を凡夫に授けたまふ時信心とは言はるるなり」と、仰せられてあるが、いかに眞實心に成ろうと努力しても凡夫にはまことの心はないのだ。それにまことの心と読むのは全く仏智の入れ智慧だから言えるのだ。その信心を凡夫に授けたもう時と仰せられて有るが 受け取ったか、諦得出来たか、皆観念の遊戯になつてはいないか、机上の空論になつてはいないか、成程そうかと馬耳東風に聞き流してはいないか。如実の聞なら如実の心となる。如実の心なら 機法一体だから法を見てよし機を見てよし、往生に對する不安は微塵もないから信心と言わるるのだ。

歡喜とは身を喜ばし心を喜ばすのだ。天に躍り地に踊り、間に合わない奴が本願の間

に合うた喜び、聖人は廣大難思の慶心と仰せられてあるではないか。喜びの出て来ないのは合点だけで、深信が抜けているから喜びが出てこないのだ。喜んで来いと仰有らないと逃げるが、喜ばずに来いとも仰有つてはないぞ。喜ぶ喜ばないは自分の勝手だ。大経には信心歡喜、踊躍歡喜とお慈悲が届けば喜べると書いて有るのだ。合点位で喜べるものかい。それでも歎異鈔の第九節には「よろこぶべき心をおさえて喜ばせざるは煩惱の所為なり」と仰せられてあるではないかと、自己の未信を弁護する為に使うているが、何と情けない信仰かい。

歎異鈔は信後の懺悔であり、語っている者は、信前の入口で不安を誤魔化す膏薬に使うているのだ。一度信樂開發すれば順境と逆境とを問わず、喜びは泉のように相続するのである。相続しないのは第二十願の雜修の桁にいるからだ。呪い合っている世の中に光り輝く生活とは、此の世の極樂だ。喜ばずにはいられない。